

# 古川柳研究会会報

一四五号

平成二十年四月

川柳評万句合明和四年輪講

平成二十年二月九日

礎講 菊池健二

明四桜6続き

37 たがひろくしたへと女房利つめにし 末初9

(誰が広くしたえと女房理詰めにし)

理詰めⅡ理屈で議論・思考などをおしすすめること。

また理を言いたてて責めること。(日)

夫婦の閨房での会話。「お前のは広くて締めまりがない

な」「何言ってるのよ。誰が広くしたのさ」。

大あちは間口が広いなどいゝ 末三16

が、礎講通りということに。

きつい事十五夜及び十三夜 一九2

40 ○ 行水のわく内うらで式ばんとり 五7

(行水の沸く内裏で式番取り)

行水の準備が出来るまでの間、裏庭で相撲を取ったり

する。汗をかいた後行水を使ってさっぱりしようという

夏の夕方の光景。

なげるなといふハ涼の角力なり 七8

41 × 座頭の坊殿に逢ふと大きく出 拾九31

(座頭の坊殿に逢おうと大きく出)

旗本などの屋敷へ貸金の取り立てに來た座頭が、「あ

んたら下っ端では話にならない、殿に会わせてもらおう

じゃないか」などと、大きな態度に出て掛け合っている。

座頭の坊ミそ役人をいゝまかし 明元仁2

42 ○ 御供だと母に立ッあつて行キ

(御供だと母に立って会って行き)

御殿勤めをしている娘が、主人の御供でたまたま家の

近くを通ったので、「御供で来たのだから、ゆっくり上

がってはいられない」と言いながら、立ったままで母親

38 ▲ こし越へ来て人々ハはちぶされ

(腰越へ来て人々は八分され)

八分するⅡ人を忌み嫌う。のけものにする。(江)

義経が平宗盛を押送して鎌倉に入ろうとしたとき、頼

朝に拒まれた(八分された)ため、やむなく腰越に留ま

つていわゆる腰越状を書く場面を詠んだ句。

大あたまふつてこしごへかぎりなり 天七125

39 十三夜先月酔た笑ひか出

(十三夜先月酔った笑いが出)

礎講は、九月十三夜に登楼した客が、先月すなわち八

月十五夜にひどく酔ったことを、仲間や相方などと笑

ながら話している光景とした。

席上では、十五夜を仕舞つて鈍子へやられた息子が十

三夜に自嘲の笑いを浮かべている様子との意見もあつた

に会っている様子。

43 × りやうり人元が八百屋のかけたおれ 拾九31

(料理人元が八百屋の掛け倒れ)

掛け倒れⅡ掛金の回収ができないで損すること。(日)

礎講は、①八百屋をやっていた人が、商売の掛金の回

収が出来なくて倒産したので料理人になった。②いろい

ろな事に手を出した人が失敗して料理人になった。の二

説が考えられるが、①かとした。

席上では、①であろうが、魚屋ならともかく八百屋の

なれの果てではろくな料理も作れまいと嘲ったニュアン

スがあるのではないかということに。

りやうり人かしへ顔出しならぬやつ 明六55会

44 × まだほへて居ますかと聞しうとばゝ 五7

(まだ吠えていますかと聞く姑婆)

吠えるⅡ泣くを卑しめ、また罵っている。(江)

姑婆が「嫁はまだ吠えていますか」と聞いている。自

分がいびつて泣かせたくせに、わざと聞こえよがしに憎

たらしく言っているのであらう。

又泣ておどしやるのかとしようとはゝ 明四礼3

45 ▲ おやたちの前から取<sup>ル</sup>と茶やはい<sup>ゝ</sup> 五7

(親たちの前から取ると茶屋は言い)

息子が放蕩を続けて、なじみの引手茶屋にツケが溜まつてしまったが、本人は決済できそうにない。そこで茶屋が「親たちの方から取ればいい」と言っている。

うけとりを取てお袋茶屋を出る 一七7

46 × 気味の能欠落をするなにわがた

(気味のよい欠け落ちをする難波潟)

難波潟Ⅱ大阪湾、特に旧淀川河口付近の海の名。淀川河口の付近では入り江が深く入り込み、潟湖となつて葦が繁茂していた。(目)

礎講は、謡曲『蘆刈』の句とし、別れた夫婦が難波潟で思いがけなく再会して京都へ帰るというストーリーを「気味のよい欠け落ち」と表現したものとした。

席上では、ハッピーエンドで京へ帰ることを「欠け落ち」と言うかどうかなどの疑問が出され、結論出ず。

47 ○ 相ごしで箱をころすがしわいいしや 拾九31

(相興で箱を殺すがしわいい医者)

相興Ⅱ一つの興に二人で相乗りすること。(江)

医者が薬箱を持つ供を連れることなく、自分で薬箱を

51 ○ ふくミ状ひどあか切<sup>レ</sup>ハ書<sup>キ</sup>おとし 五7 拾六1

(含み状ひどあかぎれは書き落とす)

含み状Ⅱ自害する際、心中を訴えるため思うところをこまごまと認め、口中に含んだ書状。(江)

ここで含み状は「義経の含み状」のことであろう。衣川で自刃した時の含み状には、幼年期の苦難のことが書いてあるが、「ひびやあかぎれ」のことは書いてないというまで。

よしつねハ野宿もしたと書<sup>キ</sup>のこし 安六仁3

52 × せ戸ものやあたり近所へそんがしれ 五7

(瀬戸物屋辺り近所へ損が知れ)

瀬戸物屋という商売は、商品が倒れて壊れたりすると大きな音が出て近所へ損をしたことが知れる。

そんさんのせけんへひどくせと物や 四〇17

53 ▲ 秀平のねまりめさるの頼もしさ

(秀衡のねまり召さるの頼もしさ)

秀平Ⅱ奥州平泉の藤原秀衡。

ねまるⅡある場所に座を占める。一か所に滞在する。中世から近世にかけて、北国・東国語として文芸作品の中で多く用いられた。(角川)

抱えて駕籠に乗るのを「箱を殺す」と表現し、これを「しみつたれた医者だ」と言った句のようである。「医者」が「殺す」というのがミソ。

48 × 地ひどきをさせてあさづけ出<sup>シ</sup>て来<sup>ル</sup> 傍四22

(地響きをさせて浅漬け出して来る)

浅漬桶の重石を地響きをさせて地面に下ろし、浅漬けを出して来る。重石は文字通り重いのである。

勇力をふるひ浅漬出して来る 宮四27

49 ○ 近所にハ居<sup>ル</sup>なと母は貳両かし 五7

(近所には居るなと母は貳両貸し)

勘当された息子が母におねだりにきたので、「家の近所には居るな」と言いながら二両渡しやる。

近<sup>ン</sup>へんにからまつて居て母をはぎ 四36

50 たつた今出来たこふだといふ座頭

(たつた今出来た瘤だと言う座頭)

盲目の座頭は、あちこちにぶつかつてよく瘤を作る。いままた「この瘤は今出来たばかりの瘤だ」などと言つてふざけている。前句「おどけこそすれ」。

尤もさ座頭と座頭つき当<sup>ッ</sup> 傍二28

義経が、頼朝の追つ手を避けて再度藤原秀衡のもとに身を寄せたとき、秀衡が東北弁で「ゆっくりご滞在下さい」と迎え入れてくれたのは、どんなに頼もしく感じたことだろう。

まつ秀衡と頼む身の秋 ケイ一九30

54 もちろんのことといしや殿笑て居

(勿論のことと医者殿笑つて居)

医者が患者に対して「勿論のことです」と笑いながら言っている。患者が「房事の方はダメでしょうね」などと質問したのに対し、医者が笑いながらもきつぱり禁止しているのである。

いしやとのハ女房か立といけんいひ 九9

55 × ふる日にはおやぶんの内こた<sup>く</sup>し

(降る日には親分の内ごたごたし)

外へ仕事に出かけられない雨の日には、親分の家は配下の連中でごたごたしているというのであろう。

むだ喰のあるかおやふんきついミそ 明六鶴3

56 居眠<sup>ッ</sup>をするなとばかでつつつかれ

(居眠りをするなとばかで突つかれ)

ばかⅡ銭の数はかる用具。二対一の長さのクランク型の金属製の棒で、長い方で一〇〇文を、短い方で五〇文を数える。(目)

博奕場で「居眠りをするな」とばかで突っつかれてい  
るというのであるが、突っつかれてい人物がはつきり  
しない。勝負に参加していない人物であろうから、箱番  
かあるいは負けがこんで見物している奴であろうか。

箱番の内とつくりとやにをほり 宝一三満2

57 × 野雪隠へびの出たので場所をかへ

(野雪隠蛇の出たので場所を変え)

「野雪隠」は野外で用をたすこと。しゃがんだ所で蛇が  
出たので、びっくりして場所を変える。

それへびかなどゝおとかすのせつちん 安五仁4

58 × 間男のふ首尾ハこぼしくにげ 末初9

(間男の不首尾はこぼしこぼし逃げ)

間男の最中に亭主が帰ってきたので、男が腎水をこぼ  
しながら逃げたということ。山路閑古氏が「愚痴をこぼ  
しながら」とされたのはとらない。

まおとこのはだしハきつひふ首尾也 明元亀1

の意見あり。

七人の老人ハ袖の入らわらひ 宝八桜3

3 × 奥さまの御そばへげい子にげて来る

(奥様の御側へ芸子逃げて来る)

殿様のお屋敷の宴会に呼ばれた芸子が、誰かに悪さで  
もされたらしく奥様の側へ逃げてくるという光景のよう  
である。

おくさまのよぶおとり子ハおとるなり 明八義2

4 言年のなまぐさに成るがざり海老

(老年の生臭になる飾り海老)

飾り海老Ⅱ正月の飾りに用いる海老。(目)

飾り海老は一年の生臭物の始めだという意であろう。

正月飾りの中で海老だけが生臭物である。

蓬菜に積バや伊勢のかざり海老 七四5

5 ▲ 紫に成程つめる江戸のはり 五7

(紫に成る程つめる江戸の張り)

江戸の張りを身上とする吉原の遊女は、江戸の象徴で  
ある紫色に成るほど客をつねる。

江戸の張り紫色のつめのあと 九一43

松1

釣合にけりく

○ よくばりにけりく

▲ はんじやうなことく

× ほめられにけりく

やくそくし

1 × 青そらに直してかへるひの衣 五7

(青空に直して帰る緋の衣)

謡曲『雷電』に取材した類句多数の一。道真が雷電と  
なつて暴れた時、師の僧正法性坊がこれを鎮め、すつか  
り青空に直して比叡山へ帰っていく。

らく中をあかるみにするひの衣 天五信1

2 × まぜこぜに成て御舟へいらつしやり 拾二15

(まぜこぜになつて御舟へいらつしやり)

宝船・七福神の句のようである。七福神には女性あり  
実在・架空あり、諸国のいろいろな神様がまぜこぜに乗  
っている。

席上では、主題句が『拾遺』の「恋」の部に採られて  
いることから、『拾遺』の編者は、殿様が踊子などと一  
緒に船遊山をしている光景と考えたのではなからうかと

6 × へらおしに地主の姫ハ礼に来る

(へらおしに地主の嫁は礼に来る)

「へらおし」がはつきりせず。「籠押し」(辞書にはな  
い)か「平押し」ではないかと思われるが、いずれにし  
ても句意は、地主の嫁は借地・借家人に對し漏れの無い  
ようしらみつぶしに回礼にやってくるという意かと思わ  
れる。平等に扱わないとトラブルの元になるのである。

姫の礼落スと地主ぶるといゝ 安元仁2

7 × 市かへり大戸上ろとしよつて居ル 五7

(市帰り大戸上げると背負っている)

年の市へ買い物に行き、大荷物を背負つて帰つて来た  
場面。荷物がつかえて潜り戸から入れないので「大戸を  
上げる」と言っている。

正月をしいこんで来る市帰ル 六八23

8 × なまかべ御使者を通御立身 五7

(生壁へ御使者を通す御立身)

昇進した武士が、屋敷の壁を塗り直してまだ乾ききら  
ない生壁のところへ、祝い物を持ってやってきた御使者  
を通すという光景。新たに拝領した屋敷かもしれない。

御立身なまかべ馬のりかける 安五智1





